

平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	名古屋市立丸の内中学校	氏名	河村有紀
-----	-------------	----	------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

現在受けもつ中学3年生の英語の教科書にガーナとカカオを扱った教材がある。児童労働やフェアトレードを題材にしたものだ。その実態を知り、生きた情報を生徒に伝えることが研修の目的の一つであった。農園でカカオが栽培されてからカカオ豆が出荷されるまでの行程や厳しい品質検査を受けてから日本に向けて出荷されるまでの行程などをしっかりと見学し、学ぶことができた。一番の収穫は、教科書に書かれている内容が現地の一般的な状況ではないということだ。ガーナのカカオ豆は国によってしっかりと管理されていて、基本的に適正価格で取引をされている。また、児童労働をなくすためにNGO団体だけでなく、国でも取り組みを行っていることが分かった。授業実践の中で、現地で得た事実を生徒に伝えていきたい。

もう一つの目的は、勤務校の国際理解教育のカリキュラムを作成することである。現地で多くの情報や教材を入手し、人脈も増やすことができた。計画的に作成していきたい。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

何とんでも「笑顔」は世界共通で世界最強のコミュニケーションツールである。言葉が違っても一緒に笑うことで親近感を抱くことができた。ガーナの方は、職場の仲間も家族のように大切にしているようである。どこへ行っても多くの方が出迎えてくれ、上司が職場の仲間を紹介する。初めは慎重なガーナ人もお互いの自己紹介が済むと一変して家族のように受け入れてくれる。みんなで列になって、順番に右手で握手をする。そんなガーナ式の挨拶や贈り物を渡した時に必ず記念写真を撮る風習が興味深かった。

また、現地の言葉を少し使うだけで大変喜ばれた。地元の料理を食べ、おいしいと言うと嬉しそうであった。ガーナの方は自分たちの国や文化に誇りをもっている。「郷に入っては郷に従え」訪問する私たちは、現地の風習や食べ物をそのまま受け入れ、尊重することで「肯定的に出会う」ことができるのだと感じた。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

やはりガーナと言えばチョコレート。今回の研修ではガーナで植えられた最初のカカオから、厳しい品質検査を受けて日本に出荷されるまでの様々な段階を見学することができた。多くのガーナ人の手を経て、日本に送られ、チョコレートとなり日本人の手元に届く…。遠い国だが、深いつながりのある国であった。

また、ガーナで活躍する日本人の方々と出会うたびに、胸が熱くなった。地元の方と同じ物を食べ、同じように生活し、一緒に課題に取り組むことで築きあげられた信頼関係は確固たるものであった。ガーナの方がどこへ行っても日本人である私たちを手厚く迎えてくれたのは、これまでガーナと日本をつないでくださった先人たちとその思いをきちんと受け継いでいる現地の日本人の地道な努力のたまものだと思う。日本の「技術」

とともに「国民性」を誇らしく思った。この感動を生徒に伝え、自分が興味をもったことをどんどん突き詰め、広い世界に視野を向け、活躍できる生徒を育成していきたい。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

未来を創るのは子どもたち。その子どもたちを育てる「教育」と「学校現場」には課題が山積み。ガーナで訪問した学校の子どもたちは、夢をもち、学習意欲もあった。しかし、教科書や教具、チョークすら十分に行き届いていない。実際の磁石を見たことがない先生たちが、N極とS極の指導をしなければならない。丸暗記の指導法で、成績が悪いとムチを使って指導することもあるようだ。また、指導要領が改訂されても教科書が改訂されていなかったり、九九の2の段までしか教えられていない2年生の教科書に突然割り算の問題が載っていたり…。国レベルでの改善も急務。そんな中、青年海外協力隊員の方は自作で教材を作り、先生達向けに講習会を開き、子どもたちの、そして先生達自身の学ぶ意欲を引き出していた。

教育課題は日本でも同じ。会議室で話し合われたことが現場の教員に浸透していなかったり、現場の状況とずれていた…。生徒の知的好奇心を刺激し、学ぶ楽しさを実感させ、将来へ希望をもたせられるように、日々の努力を怠らず、生徒の可能性を引き出せるような教師になりたいと決意を新たにしました。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

参加者同士で学び合うシステムは本当に素晴らしい。感じたことを話したり、ワークシートや写真などを共有することで、自分では気づけなかった視点に触れ、考えが広がったり、深まったりした。今回の研修でも参加者から学ぶことがとても多かった。また、現地での研修も毎日とても有意義であった。教育、農業、インフラ、医療、食とさまざまな分野からガーナやJICAの活動を知ることができた。そして、何よりも事前研修が素晴らしい。ただ、欲を言えば、もう少し早い時期から研修をスタートさせた方がありがたい。6月から学校現場も忙しくなるため、たくさんの資料をいただいてもなかなか目を通すことができなかった。また、もっと早くから研修がスタートしていれば、海外研修に行く前に、生徒への実践を行うことができた。実際のガーナを見る前に、あまり実践のねらいや内容を決めてしまわない方がよいというアドバイスも受けたが、行く前から生徒を巻き込んだ方が、生徒も自分がガーナに行った気持ちになれるし、より先生の報告に興味深く聞くことができるのではないかと感じた。また現地での教材の収集効率も上がったのではないと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

③ 農家訪問／青年海外協力隊（農産物加工）活動

ガーナには日本という「農協」がなく、オレンジ1000個が5GHC（約150円）で取引され、収穫したオレンジの半分以上を廃棄してしまう農村地区。これらをジュースやジャムに加工する技術を指導するために派遣された三上志保さん。外国からのボランティアを受け入れたことのない地域で、農家一軒一軒をバイクで何度も訪問し、少しずつ講習会に参加する農民を増やしていったそう。案内していただいた農家は、広大な農地でヤムやキャッサバなどの芋類、オレンジ、カカオ、ヤシ、リンゴなどの栽培から魚の養殖まで行っていた。

この地方は土壌がよく、肥料なしでも農作物がよく育つ。大人数でズロズロと広大な農地の視察を行い、オーナーが自慢の農作物を見せてくれ、ヤシやカカオの実の試食をさせてもらった。「エクイア Shiho!」と大きな声で何度も呼ばれる三上さんの姿に、彼女がいかにも地元の方に信頼され、愛されているかを実感した。任期が残り半年となり、「コミュニティを1つ育て、加工品を販売するまでにしたい」と熱く語る三上さんはステキだった。(河村有紀)

④-2 現地の方の自宅でのバンクー作り体験

青年海外協力隊の吉田華奈さんのホームステイ宅に伺うと、笑顔のすてきなお母さんが出迎えてくれた。玄関先にある釜戸に薪をくべ、大きな鍋で2日ほど発酵させたメイズ(トウモロコシ)の粉の練りものに少しずつ水を加え、大きなヘラでこねる。これがガーナ人のソウルフード、バンクー。鍋は器用に足で固定し、焦げないように底からしっかりと混ぜる。徐々に水分がぬけ、最後はマッシュポテトのようにボテッとなるまで煮詰めた。一見簡単そうに見えたこの作業、私たちも順番に体験させていただいたが、なんのその、とても力が必要。鍋の側面をつぶすように混ぜるのだが、男性陣ですら苦戦。それを見て楽しそうに笑うお母さん。できあがったバンクーは一人分ずつ袋に入れて丸める。働き者のお母さんの手の皮は分厚く、熱いものを持って平気のようだ。それをお母さん特製の魚のダシが効いたスープにつけて食べる。フーフーよりも酸味があり、少し苦手な人もいたが、この味はクセになる。このスープに茹でたオクラが合い、とてもおいしかった。(河村有紀)

⑫-1 アクラのローカルマーケット

第一印象は、そこら中に散らかる大量のゴミの汚さとその臭い。普段は朝5時からヤシの葉を使って掃除をするそうだが、私たちが訪れた日曜日は教会に行く日だったため、掃除はされていなかった。それにしても、食べ物も売っていただけに衛生面が気になる。露店は大通から路地裏まで並んでいて、衣類やくつの店が多かった。仕立屋で大きな男性が足踏み式のミシンを使ってシャツを縫っていたり、女性がかつらの髪の毛をくしでとかしていたりと興味深かった。路地裏に一步足を踏み入れると、人がすれ違うのがやっとの狭い舗装されていない道にお菓子やニワトリ等が所狭しと売られている。聾者の方が楽しそうに手話を交わしながらアイロンをかける。そこにはアクラ市民の日常があった。店の人は私たちに買わないかと声をかけるが、それほどしつこくない。土産物屋でガーナの国旗を発見。3人買うからと値段交渉。現地の方との交流や値段交渉が楽しかった。(河村有紀)

⑮ 太陽光パネルプロジェクト

日本から6.1億円の無償資金協力を得て2010年にスタートしたプロジェクト。二基目の建設が完成し、8月12日に引き渡し式が行われた。一基目は315、二基目は405、合計720KWを送電できるようになり、隣接するアクラ大学野口記念医学研究所の昼間の電力をすべてまかなえるようになった。これで年間一千万円程度の節約になっているとのこと。太陽光パネルの寿命は一般的に20年から25年だが、土台とパネルは日本製を使用しているため、メンテナンス次第でさらに長く使えるそうだ。驚いたことは、このプロジェ

クトの現場で指揮されていたお二人の日本人は60歳を超えたベテランであったこと。時に40度を超える暑さの中、言葉や文化の違うガーナ人に仕事を教える際の苦労を話してくださった。「一度に2つのことを伝えることは難しく、一つずつ教えている。しかし、労働者が毎日変わり、また一から教える。その繰り返し。」日本の高い技術をもったたくましい人材は、日本の宝だと思う。(河村有紀)

②③ おはようマーケット、グローバル・ママスの店など

最終日はガーナセディもまだ手元にあり、お土産や教材を買おうとみんな気合いが入っていた。日本人経営の「おはようマーケット」。10畳ほどの店内にシアバター、民族衣装、かごバッグ、しおりなどが置かれていた。男性陣は民族衣装を買い占めていた。毎度のことながらレジは時間がかかった。商品の名前一つ一つをノートに書き、手書きの領収書をくれる店員さん。でもこの領収書、カーボンシートを使用していないため、店には控えが残らない。ここでも、ガーナへの支援の必要性を感じた。

アメリカのNPO団体が経営する「グローバル・ママス」。ここには観光客向けのかわいい商品が並んでいた。少し値は張るが、現代風にアレンジされた洋服やかばん、さまざまな種類のシアバターやシア石けん、アクセサリーなどが売られていて、女性陣の目が輝いていた。

最後に訪れたのは「ワイルド・ゲッコー」。広い店内で、あらゆるものが揃っていた。楽器や布、本、ソープストーンの置物など、アフリカらしい土産物を買うことができた。ここではクレジットカードもドルも使えた。

空港内、国際線出発ロビーの中にも土産物を買える場所が2カ所あった。ケンテやキーホルダー、大きな太鼓や「タカイ」というカカオのお酒など、もちろん少し高めだが品揃えは豊富であった。大きな免税店を過ぎ、飛行機に乗る直前にも売店があり、ここではチョコレート（工場で見えなかったオレンジやレモン味のバラ売り）とシトー（ガーナの香辛料）の瓶詰めを買うことができた。(河村有紀)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [FRK_4288]

◇キャプション：名ドライバー アニムさん

◇解説文：

一番お世話になったガーナ人。機転の利いたアドバイスをしながら、朝から晩までガーナ中を案内してくれたアニムさん。力持ちで、寡黙で、誠実で、優しいイケメン。貧しい幼少時代を経て、今や都会で家を持つまでに！



●写真2…ファイル名 [KWM_0827]

◇キャプション：何百回、水くみをしてきたことか…

◇解説文：

現地でホームステイをしながら教育支援を行っている吉田華奈さん。現地の



方に寄り添い、同じ食事とライフスタイルをする中で培われた信頼関係に感動。孤独や不安、教育環境への憤りとも一人で戦ってきたのでしょう。

6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

【ガーナ編】

- ・野口研や残留農薬研究所では専門的な単語がたくさん出てきて、予備知識が不十分であったため、一生懸命説明して下さったのに、きちんと理解することができず申し訳なかったです。日本人の専門家がみえず、自分たちで通訳をする見学地については、事前学習と主な専門用語を勉強しておくと思えます。
- ・アメ以外のお菓子も持って行きましたが、あまり現地の方に渡す機会はありませんでした。「日本人が来たら、何かもらえる」と思うと、現地の日本人が今後活動しにくくなるとのことでした。ガーナチョコレートもたくさん持って行きましたが、カカオ農園の方に食べてもらったくらいで、なかなかチャンスがありませんでした。
- ・ガーナ料理に使われるパーム油や疲れなどでおなかを壊す人もいました。ポカリの粉末、フィナンシェ、なごやん（笑）など、少し甘くて食欲がなくても口に入れやすい物を準備するとよいと思います。
- ・アクラの高いホテルにだけ、部屋に湯沸かし器がありました。
- ・中華料理に行く機会が多いのですが、辛いメニューも多いので店員に聞きながら注文した方がよいです。
- ・稲作現場を見学した際、来てくださった農家の方8名ほど？にアメを5個ずつお渡ししました。突然お土産が必要になることもあるので、アメを持って行くのが便利です。
- ・コンセントは宿泊したホテル3カ所中2カ所は、日本と同じままで使用できました。変圧器は必要なかったです。
- ・ケープコースト城には、懐中電灯をグループで1つ、2つあると助かります。また、停電が多いので、持っているのが便利だと思います。
- ・停車中に売りに来た大きな地図を20GHGで買いました。（ヨーロッパ中心世界地図、アフリカ地図、ガーナ地図）
- ・Golden Tree チョコレート工場に行く前日、購入予定のチョコレートの個数を電話で伝え、キープしてもらいました。ただ、大きいサイズと小さいサイズがあるので、注意が必要です。

【全般】

- ・お土産係としての反省。大・中・小の3種類を準備しましたが、大と中は現地の方向けのお菓子を用意してしまいました。「中」は日本人の専門家個人に渡すことも多かったため、日本人に渡す用のお土産は、数は少なくても品のいい、和風な食べ物にするべきでした。どんな方に渡す予定なのか、分かる範囲でお聞きし、相手に合ったお土産を購入した方が喜ばれると思います。小は青年海外協力隊の方にお渡ししました。どなたも「うまい棒」に歓声をあげていました。アメはいろいろな場面であると便利でした。
- ・一日の行程が終わると疲れ切っていますが、やはり、その日のことはその日のうちに「マナビノオト」に書かないと残念ながら忘れてしまいます。車窓から見て気づいた、細かいエピソードも、のちに貴重な教材に

なります。

- ・動画の係の人は、何月何日で、今どこへ向かっていて、どんな場面なのか、などポイントポイントで言葉を入れた方がわかりやすいと思います。

7. その他全般を通じての感想・意見など

このような貴重な体験をさせていただいたことに感謝しています。多くの先生方が参加され、中部地区の国際理解教育が発展していくことを願っています！

以上